

3 血管柄付き遊離皮弁による口腔癌再建手術に対する周術期口腔機能管理の有用性に関する検討

田中 彰***・五十嵐隆一***
鈴木見奈子******・山口 晃*
又賀 泉***

日本歯科大学新潟病院口腔外科*
同 口腔ケアセンター**
日本歯科大学新潟生命歯学部
口腔外科学講座***

2012年4月の診療報酬改定で、周術期等の口腔機能管理が保険収載され、急性期病院における医科と歯科の連携の重要性が増している。当科では、2006年4月より周術期専門的口腔ケアを本格的に導入し、すべての全身麻酔手術症例で施行している。そこで、感染リスクが高いとされる血管柄付き皮弁による口腔癌再建手術における周術期専門的口腔ケアの有用性について血管柄付き遊離皮弁や遊離骨皮弁を用いて再建手術を施行した口腔癌症例26例(ケア群)と、それ以前のケア未施行で同等の手術を施行した22例(未施行群)を対象に検討した。術後創部感染が、未施行群では7例(31.8%)に認められたのに対し、ケア施行群では2例(7.7%)で有意に少ない結果が認められた。またケア施行群では術後在院日数において約9日間の短縮が認められた。

口腔癌再建手術において、統計学的に周術期口腔ケアが感染リスク軽減を促す要因の1つであることが示唆された。

4 上顎歯肉扁平上皮癌の頸部転移様相

新垣 晋・金丸 祥平・船山 昭典
新美 奏恵・小田 陽平・三上 俊彦
菅井登志子・齊藤 力・星名 秀行*
永田 昌毅*・高木 律男*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
顎顔面再建学講座組織再建口腔
外科学分野
同 口腔健康科学講座顎顔面口腔
外科学分野*

上顎歯肉扁平上皮癌の頸部転移様相と転移に関連する因子について報告する。対象は上顎歯肉扁平上皮癌61症例で、転移頻度、転移部位、転移個数、また抜歯の有無、腫瘍の占拠部位、T病期、骨浸潤の有無、および分化度と頸部リンパ節転移との関連性について検討した。頸部リンパ節転移は後発転移を含め30例(49%)に認められ、転移部位はLevel1 41%、Level2 54%、Level3が4%で上頸部に局限していた。転移個数は1個から6個であった。転移に関連する因子では、抜歯(有:無; 58%:47%)、占拠部位(前方:側方:後方; 53%:36%:53%)、T病期(T1:T2:T3:T4; 28%:67%:17%:50%)、骨浸潤(有:無; 59%:23%)、分化度(G1:G2:G3; 38%:42%:78%)であり、骨浸潤の有無と分化度が頸部転移と関連する因子であった。61症例の5年累積生存率は69%であった。

5 当科におけるプロヴォックス手術の現状

佐藤雄一郎・山崎 洋大・小木 学

県立がんセンター新潟病院頭頸部外科

喉頭全摘は1873年にBillrothが初めて成功した術式である。喉頭、下咽頭癌に効果的な治療法だが、発声機能、鼻呼吸、嗅覚の喪失などの合併症は重篤である。当科では2007年4月より喉頭下咽頭癌の根治と機能温存の両立をテーマに各種治療法を導入してきた。従来からの放射線化学療法に喉頭温存下咽頭部分切除、喉頭垂直部分切除、CHEPを加え患者のQOL維持に努めている。

また、喉頭全摘が避けられない症例にはプロヴェックス手術を行ない術後のQOLを担保している。本術式は、現時点で優良な発声機能回復手術だが全国的に導入施設は少なく、当科の経験例数も2007年4月から現在まで22例で多いとは言えない。しかし、全体の約50%（12例）は過去6ヵ月以内の施行症例であり、今年になってから患者ニーズが急増してきている。今回は、本術式が徐々に新潟県に普及してきた要因（医療者側、患者側）を考察する。

6 がん治療における中枢神経系オンマイヤーリザーバーの意義

高橋 英明・宇塚 岳夫・五十川瑞穂

県立がんセンター新潟病院脳神経外科

オンマイヤーリザーバーはがん治療において腫瘍嚢胞内や脳室、腰椎髄腔に設置し、抗がん剤の注入や嚢胞内液吸引、脳脊髄液の廃液などに用いられている。この5年間の当科における使用症例について検討した。

対象は30症例あり、その内訳は血液癌11例、固形癌の転移性脳腫瘍14例、原発性脳腫瘍5例であった。使用目的から見ると、血液癌の中枢神経浸潤に対する抗がん剤髄腔内投与のための12例であった。生検や嚢胞液の廃液のみの目的で行われたのは8例で、定位放射線治療用に腫瘍縮小させる目的で行ったものが10例であった。有害事象は局所感染2例、チューブの閉塞2例、髄腔内投与による白質脳症1例であった。当初は抗がん剤の髄腔内投与例が多かったが、腰椎穿刺による間欠的髄腔内投与法導入後は減少してきた。嚢胞性転移性脳腫瘍に対して定位放射線療法の適応とするためのオンマイヤーリザーバー設置は有効で、今後も多く応用されるものと思われた。

7 院内がん登録からみた当院のがん医療動向

竹之内辰也・関根 知香・藤田 智美
樽木 雅代・富樫めぐみ・熊倉 彩夏
丸山 洋一*

県立がんセンター新潟病院情報調査部
同 麻酔科*

当院では1961年の開院当初より院内がん登録を行っており、2010年までの登録患者数は61,459例に及ぶ。2000年以降急激に増加したが、近年は2,600-700例で推移している。2010年は肺、胃、乳腺、前立腺、結腸の順に上位5がん腫を占めた。入院患者総数に占めるがん患者割合は1990年の47%から2000年は68%、2010年は82%となり、がん医療への特化が進んでいる。当院では登録後20年間の予後調査を毎年行っており、1年間受診歴のない患者には文書による問い合わせや本籍地照会を実施し、ほぼ100%の予後判明率を達成している。2001-05年に登録された11,632例の5年全生存率は65%で、1971-75年(3,849例)の38%と比べて著しく予後が向上していた。今後の課題としては登録様式の標準化、登録精度の向上、データの二次利用、診療情報管理士の充足などが挙げられる。

8 がん緩和ケア250例の検討

齋藤 義之

県立がんセンター新潟病院緩和ケア科

【目的】がん専門病院である当院において緩和ケア科が介入した症例の検討を通じて「早期からの緩和ケア」の現状と課題を明らかにする。

【方法】2009年5月から2012年4月までの間に当科を受診したがん患者250例（男性/女性：112例/138例）を対象として、診療録を基に背景因子についてretrospectiveに検討した。

【結果】年齢は中央値60歳（4～92歳）で、観察期間は中央値37日（1～1036日）であった。PSは0が41例（16.4%）、1が44例（17.6%）、2が84例（33.6%）、3が42例（16.8%）、4が39